

新学習指導要領の下での授業実践

— 小中連携を意識した学習指導について (1) —

松尾 砂織 小廣川和恵 安松 洋佳
檜葉みつ子 柳瀬 陽介 松宮奈賀子

1. はじめに

小学校では昨年度から、中学校では今年度から新学習指導要領に基づく指導が完全実施されている。外国語科では、小学校において外国語活動が必修化されたことにより、小中の連携と指導の接続が益々重要となってきた。昨年度まで本学校園では、小学校外国語活動部会と中学校英語部会が別々に研究を行ってきたが、今年度から小中合同の外国語部会を発足させ、研究を進めて行くこととした。

特に、小学校から中学校入門期に於ける系統的な学習指導の在り方や、中学校卒業時を見通した上での思考力・判断力・表現力の育成を目指した学習カリキュラムの開発について研究を進めている。

今年度は主に、小学校と中学校との教材の繋がりに視点を置き、小中を俯瞰する言語活動と評価の観点を開発することを目指し、来年度以降の実施を目標に研究を進めている。

2. 本学校園のこれまでの取り組み

本学校園では、平成15年度から21年度までの7年間、文部科学省研究開発学校の指定を受け、国際的コミュニケーション能力の育成を中心とした21世紀型学校カリキュラムの研究開発を行ってきた。中でも特筆すべきものとして「国際コミュニケーション科」を設置し、多くの単元開発を行った¹⁾ことが挙げられる。その中で子ども達は、幼稚園から外国の方々と多種多様な直接的交流、あるいはメディア機器などを介した間接的交流の体験をしてきており、外国の方々と臆することなく触れあうことができる。研究開発指定の終了後は、低学年から継続的に外国語の学習をすることはなくなったが、活動の一部は総合的な学習の時間等に引き継がれた。例えば、6年生の修学旅行での「外国の人にインタビュー」や、9年生の「エスコートプロジェ

クト²⁾」である。これらの活動を通して、積極的に生き生きと外国人へ英語で話しかけ、コミュニケーションを図ろうとする子ども達の姿を多く見ることができ

る。このように、国際コミュニケーション科で行われていた体験的な活動や効果的な指導事例等を引き継ぎながら、平成23年度からは新学習指導要領に基づいた外国語活動をスタートさせた。本学校園は小中が同一敷地内にあり、ほとんどの子どもがそのまま中学校へ進学することや、教員間の連携が行いやすいという一貫校としての利点を活かし、小中連携を意識した外国語(英語)の学習指導についての研究を進めている。

また、今年度からは文部科学省研究開発学校として「社会的自立の基礎となる能力・態度及び価値観の体系的な育成のための、幼小中一貫の新領域による自己開発型教育の研究開発」の第1年次として、新領域「希望(のぞみ)」の研究開発を行っている³⁾。めざす子ども像は、「様々な人々とともに、積極的に、粘り強く課題解決に取り組む中で、社会において有為な人となるべく自己の向上をはかる子ども」である。外国語活動及び英語科においては、「自己理解・自己管理能力」「人間関係形成能力」「社会形成能力」等の育成の視点を持って指導を行っているところである。

3. 先行研究

小中接続の系統的な学習指導の在り方やカリキュラム開発にあたり、主に京都教育大学附属京都小中学校の「英語教育改善のための調査研究」(小中一貫カリキュラム)を参考にして、試作を行った。今後は小中5年間を通して、発達段階に応じた目標に対する評価の観点を検討していく。

4. 小中連携を通しての共通理解

(1) 「聞く」「話す」から「読む」「書く」へ

小学校での「聞く」「話す」活動中心の言語活動から、中学校では「読む」「書く」が新たに加わり、4技能の総合的・統一的な指導を行わなければならない。

本学校園の7年生^{iv}の生徒はALTとのTeam Teaching（以下、TT）を楽しみにしており、聞いたり話したりすることに意欲的で、元気よくコミュニケーション活動に取り組んでいる生徒が多い。5月に行った英語学習に関する意識調査では、「話すことが好き・話したい」という質問に対しての肯定的回答は7割であった（図1）。

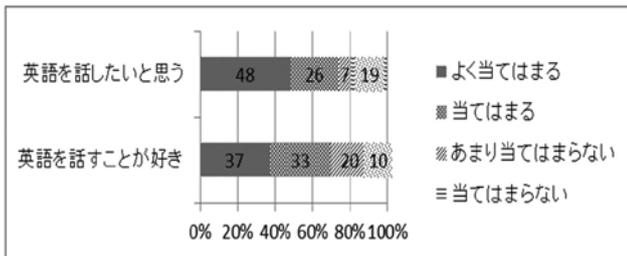


図1 7年生 英語学習に関する意識調査(話すこと)

しかし、書く活動になると英語に対して苦手意識を持っている生徒が多いのも現状である。「書くことは好きですか」という質問に対して肯定的回答は5割程度であった。その一方で、「書くことができるようになりたいと思いますか」という質問には、9割近くの生徒が肯定的回答をしており、書く力をつけたいと思っていることがうかがえる（図2）。

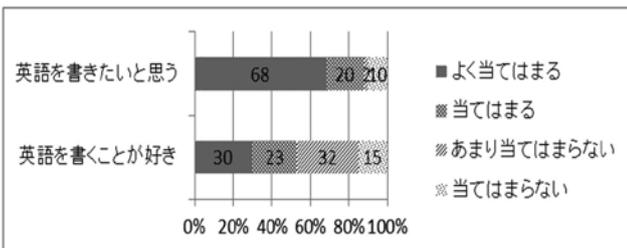


図2 7年生 英語に関する意識調査(書くこと)

第1回校内実力テスト（6月実施^v）の結果を観点別に見ると、「表現」の問題は48%で、他の観点に比べて課題がある（図3）。「知識・理解」の問題でも、単語を書く問題（hundred /thirty-one /thousand）の達成率が36%と低かった。特に、発音とつづりが結びついていなかったことで、単語を正確に書くことができていなかった。

音声中心の小学校外国語活動から中学校での「読む」「書く」活動へ移行していくこの時期、効果的な言語活動や文字指導の工夫など、どのような指導が適切で

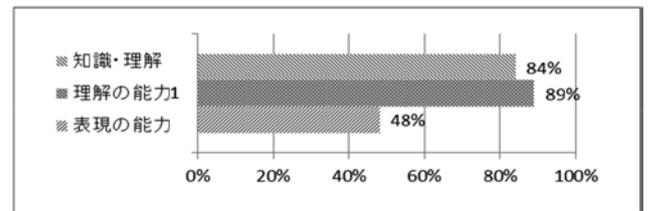


図3 7年生 第1回校内実力テスト観点別正答率

あるかを検討する必要がある。

(2) 文法事項

文法事項に関して、7年生での表現活動におけるつまずきのポイントを小中で確認した。中学校で英語を学んで約半年経過した時点で、誤答が発生しやすい発音や文法事項についての「つまずき発見テスト^{vi}」を行った。結果は表のような正答率であった（表1）。特に顕著であった誤答は、a や the といった冠詞や名詞の複数形を表すsの欠落である。日本語の感覚にはない英語特有の言語特性であり、学習の中で子どもたちに日本語と英語の言語構造の違いに気づかせるような場面が必要である。小学校の外国語活動では、文法事項は指導内容となっておらず、文法的なつまずきを特化して指導するわけではないが、指導者が中学校英語におけるつまずきのポイントを把握した上で意識して発音することにより、子どもが音声を通して英語の特徴を意識する機会が増え、中学校での英語のつまずきの軽減に繋がると考える。また、中学校においても、指導の工夫や手立てを行うことにより、課題改善を図っていく必要があることは言うまでもない。

表1 「7年生 つまずき発見テストの結果」

項目	例 【誤答→正答】	正答率
アルファベット	【mln→lmn】	89%
数字	【thirteen→thirty】	70%
曜日	【Tuesday→Thursday】	81%
名詞の複数形	I like <u>dog</u> . 【dog→dogs】	23%
代名詞	主格 Ken is my friend. <u>Ken</u> plays baseball well. 【Ken→He】	73%
	所有格 I <u>brother</u> is a high school student. 【I→My】	89%
	目的格 Ken is my friend. I like <u>he</u> . 【he→him】	81%
三単現のs	My brother <u>play</u> baseball. 【play→plays】	56%
複数主語と動詞の関係	Ken and Mike <u>goes</u> to school together. 【goes→go】 Does ken and Mike play soccer? 【Does→Do】	44%
冠詞の欠落	I'm <u>member</u> of tennis club.	0%

	【→a member of the tennis club.】	
疑問詞の後の疑問文の語順	What do you like sports? 【→What sports do you like?】	41%

(3) 教材・教具、言語活動の共有化

小中の言語活動がつながるよう、指導者全員が小中それぞれの活動教材及び教科書^{vii}を持ち、意見交流を行っている。小学校で慣れ親しんだ教材・教具を中学校でも使用することで、新出言語材料の導入時に、子どもたちは言語の使用場面の状況を把握しやすくなる。小中共通のピクチャーカードを使用し、中学校において小学校で学んだ単語や表現を想起しやすくなった。

更に、よりスムーズな接続の実現のためにクラスルームイングリッシュの共有や、動画ファイルの活用による言語活動の実践交流等を行った。これにより成長段階に応じた課題を把握し、指導と評価の観点を共有することで系統的な指導を行えるようにすることを考えている。

(4) 5年間の見通し(学習意欲・表現活動・指導方法)

学習の動機付けの面から小中の接続について見ると、小学校では6年生に「中学生になったらこんなことができる」という見通しを持って卒業させ、中学校では「小学校での体験が役に立った」という実感を持たせることが、更なる学習意欲へと繋がると考えられる。特に、最終目標となるのは、卒業前の中学生が英語でコミュニケーションを図っている姿である。中学生が小学生にとっての憧れや目標となるように、5年間を通して系統的な指導を行い、コミュニケーション力をつけなければならない。

コミュニケーション活動の特性として、小学校では英語を通した人と人との関わりが中心となる。しかし、中学校では文法指導が入ることにより、コミュニケーションが疑似体験的となる傾向がある。そこで、例えば何かを紹介する際には、誰に対しての紹介なのかを明確にするなど、相手意識を持たせることが重要となる。そのような点から、習得したことを活用する言語活動において、相手意識を持たせたコミュニケーションや表現活動となるプロジェクトを考え、小中一貫カリキュラムの中にそれらを設定した。

指導方法に関しては、授業交流を通して、様々な角度からの指導改善の可能性を探ることができた。特に中学校担当が小学校の授業を観ることで、同じ言語材料でも違った指導ができるという発見が多い。今後も

意見交流を続け、指導に繋がりと発展性を持たせ、子ども達が過去に学習したことのある内容について想起しながら新たな発見ができるようにしていく。

(5) カリキュラム作成について

来年度から実施する小中一貫カリキュラムを作成するにあたって、まず指導上の課題から作成のポイントを検討した。次いで、5年間を見通した系統的な表現活動に重点を置き、カリキュラムの柱として学校独自の「プロジェクト」^{viii}を位置づけた。カリキュラム作成の視点とポイントを次表に示す。

表2 カリキュラム作成の視点

検討課題(例)	カリキュラム作成の視点	ポイント
中学校入門期の単語導入時に、つづり、発音、意味、品詞のように、四つの内容を同時に盛り込むことは生徒にとって負担である。	どの段階でどこまでを指導するのかをカリキュラムの中に示すこと。	発達段階に応じた段階的指導事項の検討。
「カード取りゲーム」は、勝つための活動ではなく、楽しければ良い活動でもない。「楽しかった」は動機づけで、「これだけできた」という達成感が少ない場合がある。	子ども達が自分を振り返って達成感を味わうことができるように、指導者が目標設定をしっかりと行うことが大切。	活動と評価に関する考察。
体験活動では、情意的な驚き「えっ」と思う気持ちや人格形成につながる。しかし、新しいものに会った喜びは長続きがしないことが多い。	中学校で言語の仕組みに出会って「わー」と思うことが大切であり、そのような指導の工夫が求められる。	言語への気づきや発見を促す日常的な指導と、有意義な体験活動の機会の位置づけ。

5. めざす子どもの姿

学習指導要領では、目標を小学校・中学校それぞれ次のように定めている(表3)。

表3 学習指導要領 目標のポイント

小学校外国語活動の目標	中学校外国語科の目標
①外国語を通じて、言語や文化について <u>体験的に</u> 理解を深める。	①外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深める。
②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。	②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
③外国語を通じて、外国語の <u>音声や基本的な表現に</u> 慣れ親しませる。	③聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの <u>コミュニケーション能力の基礎</u> を養う。

以上の目標をふまえて、めざす子どもの姿を次のように設定した(表4)。

表4 めざす子どもの姿

小学校外国語活動でめざす子どもの姿	中学校外国語科でめざす子どもの姿
言語や文化について体験的に理解しながら外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しみ、生き生きとコミュニケーションを図ろうとする子ども。	外国語を聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を習得し、実際のコミュニケーション場面で活用して、伝えたいことを英語で発信できる子ども。

本学校園外国語科で最終的にめざす子どもの姿は、「外国語を聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を習得し、実際のコミュニケーション場面で活用して伝えたいことを発信できる子ども」とした。設定理由の背景には、9年生で実施するプロジェクトの一つである「エスコートプロジェクト」の取り組みがある。以下の表は、プロジェクトの事前と事後に実施したアンケート結果^{ix}の一部である。(表5, 表6)

表5 エスコートプロジェクト 事前事後意識変化(1)

	質問項目	肯定的回答
事前	このプロジェクトの取り組みで、英会話の力がついたと感じることがある。	55%
事後	エスコートの経験をして、英会話の力がついたと感じた。	76%

表6 エスコートプロジェクト 事前事後意識変化(2)

	質問項目	肯定的回答
事前	将来、エスコートプロジェクトでの経験が生きる場面があるだろう。	76%
事後	エスコートプロジェクトでの経験を、自分の将来に生かしたい。	83%

実施後には「英会話の力がついたと感じた」「経験を将来に生かしたい」と回答した生徒の割合が増加している。体験の成果が実感され、更なる英語学習意欲につながっていることがわかる。

一方で、次表のような結果もある(表7, 表8)。

表7 エスコートプロジェクト 事前事後意識変化(3)

	質問項目	肯定的回答
事前	相手のことを考え、内容をわかりやすく伝えられるであろう。	46%
事後	相手のことを考え、内容を整理し、わかりやすく伝えられた。	38%

表8 エスコートプロジェクト 事前事後意識変化(4)

	質問項目	肯定的回答
事前	相手が感じていることを理解しようとして、様々な質問をするだろう。	51%
事後	相手のことを分かろうと質問することができた。	51%

「内容を整理し、わかりやすく伝えられた」と回答した生徒は少ない上に、事前の予想に比べて減少している。また「質問することができた」と回答した生徒の割合は5割程度であった。これらのことから、相手を意識して説明したり質問したりする力を高めていく必要があることがわかった。

以上のことから、学習指導要領の目標を踏まえながら、本学校園最終学年である9年生で行う「エスコートプロジェクト」の成果と課題に鑑み、めざす子どもの姿を「…伝えたいことを英語で発信できる子ども」とした。

6. つけたい力

めざす子どもの姿を実現するために、小学校外国語活動・中学校外国語科で特に育成したい力(とその素地)を次の3点とした(表9)。

表9 育成したい力(その素地)

小学校	中学校
① 外国語を聞いたり話したりすることへの積極性	① 読んだことから得た知識を活用して、話したり書いたりする力
② 外国語の音声やリズム、イントネーションへの慣れ親しみ	② 内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力
③ 外国の方々との交流を通して多様なものの見方・考え方や異文化に関する気づき	③ 事物の説明や自分の意見を聞き手に対してわかりやすく話す力

7. 育成のための方法・手立て

「外国語を聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を習得し、実際のコミュニケーション場面で活用して、伝えたいことを発信できる子ども」を育成するために、次のような手だてを考えている。

(1) 「読んだことから得た知識を活用して、話したり書いたりする力」「内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力」を育成するための手立てとして、「書くこと」に関して、昨年度までの取り組みを引き続き行う。(中学校での指導事項)

① 創意工夫をして、何とか自分でやろうとする力の育成

- ・目標や目的が明確な単元設定をする。
- ・学習目標に沿った作文のテーマを自分で選び、その内容についても考えさせていく。
- ・これまで書きためた文を見直しさせ、様々な活用ができるもの、修正や大幅な改善が必要なものに気づかせる。
- ・書きためた文を使って、読み手のある音読活動を設定する。

② 自分の考えや気持ちを初歩的な英語を用いながら、他者に伝えようとする力の育成

- ・作文の内容を書くにあたって、自身でマッピングを行ったり、グループでブレインストーミングを行ったりして、アイデアを広げさせる。
- ・拡散したアイデアの中から、キーワードをまとめ、どのようなまとめかをしていくかを考えさせる。
- ・さまざまな表現や考えに出会わせ、言語の使用場面でそれらを活用させる活動を仕組む。
- ・教科書や他の教材から、学習目標に沿った語彙・表現を授業者が適宜インプットさせる。
- ・新出事項を借用したり、既習事項を活用したりしながら、言語の使用場面を考えさせる。

③ 他者とのコミュニケーションを通じて、自分の表現方法を吟味し、より適切に使用する力の育成

- ・どのような言語材料を用いれば読み手を意識した文になるかを考えさせる。
- ・できあがった作文を他者と読み合い、そこから分かったことや気づいたことをまとめさせる。
- ・他者と交流した時に、うまく相手に伝わらなかった文については、その理由を考えさせる。
- ・次回同様の作文を作る際には、どのように伝えればうまく伝わるかをふりかえりカードに書いてまとめさせる。

(2) 「事物の説明や自分の意見を聞き手に対してわかりやすく話す力」を育成するための手立てとして、表現活動をする際、話し手・聞き手として意識するポイントの指導をする。(→小中共通理解)

【話し手のポイント】

① 音声について

- ・普段から音読練習で声を出させる。
- ・read and look up で、メモを見ながらスピーチを行うイメージで練習さ、最終的には暗唱させる
- ・音声に変化をつけさせることで、スピーチが興味深いものになる。
 - ・強調 (stressing) : 伝えたい語句を強く言って、強調する方法
 - ・伸ばす (stretching) : 伝えたい語句をゆっくり(伸ばして)言って、強調する方法

- ・休止 (pausing /) : 強調したい語句の前で間をおいて、次にくる語句を強調する方法
→数字、動作を表す言葉、形容詞、副詞、比較、否定語など

- ・スピーチ原稿に、強調 (~~~~) 伸ばす (-----) 休止 (/) の印をつけさせる。
- ・聞き手をイメージしながら練習をさせる。

② 話す姿勢・態度について

- ・姿勢も大切な要素であることを意識させる。
- ・ゆっくりと落ち着いて発表させる。

③ 顔の表情・視線の配り方について

- ・うれしい気持ち・悲しい気持ちを顔の表情で表すことで、発話を補完させる。
- ・全体を見渡す時、一人一人を見つめるのではなく、聴衆の左右前後を順番に見るなど意識させる。

④ ジェスチャーについて

- ・原稿の内容と関連した、できるだけ自然なものを使わせる。
 - ・Yes/ No で首を縦横に動かす
 - ・大きさ、高さなどを手で表す
 - ・数を指で表す
 - ・自分や相手のことを手で指し示す
 - ・絵や小道具を指や手で指し示す

⑤ 視聴覚情報 (イラスト・絵・写真・実物など) について

- ・スピーチの内容が理解しやすくなるように工夫させる。
- ・統計や実例などの資料を示すことで説得力が増すことに気付かせる。
- ・相手が理解しやすいように、データの示し方を工夫させる。

【聞き手のポイント】

- ① 聞き手もアイコンタクト ② うなずく、首をふる
- ③ メモ ④ 良い点を学ぶ ⑤ アドバイス
- ⑥ 質問 ⑦ 意見・感想

8. 言語活動における指導計画 (【プロジェクト】の位置づけ)

小中5年間の繋がりを考えた系統的な学習指導として、主に外国語表現の能力を高めるための言語活動を設定し、カリキュラムの中に位置づけた (表10)。

表10 プロジェクト～カリキュラムへの位置づけ～

学年	活動名	言語活動内容	言語の使用場面・言語の働き
5年生	外国の方（留学生）と交流しよう	外国人留学生を学校に招き、自分のこと（好きなこと）、学校のこと、昔から伝わるものについて英語で紹介する。	自己紹介 場所、事物の紹介
6年生	外国の方にインタビューをしよう	修学旅行で出会う外国人観光客に、日本の印象などについて英語で尋ねる。	相手の了解を得て質問する
	あこがれの人を紹介しよう	自分のあこがれる人物とその理由について、級友や後輩に感動や共感の思いを英語で伝える。	感じたことや思ったことを伝える
7年生	文通	英語で自己紹介を書いた後、海外の中学生と文通する。	自己紹介
	好きなものを紹介しよう	英語で自分の好きなものについて書いてまとめ、紹介する。	事物の紹介
	人を紹介しよう	自分の好きな人（家族や友だち、歌手、スポーツ選手など）とその理由について、友だちに英語で伝える。	人物の紹介
8年生	英語で自分の将来を語る	将来の夢について考え、クラスの中で伝えあう。 自分の進路について考え、将来の夢や生き方を英語で書き、ALTに発表する。	自分の考えを伝える
	Show and Tell	あるテーマについて、英語で賛成意見と反対意見を述べる。	理由をつけて自分の考えを伝える
9年生	エスコートプロジェクト	外国の方々に対して、広島平和記念公園内を英語で案内するとともに、平和に対する考えを伝える。	相手の行動を促す／コミュニケーションを円滑にする
	ビデオレター：英語で日本文化発信	文通相手やエスコートでお世話になった人に、身近な日本文化を英語で紹介する。	情報を伝える
	英語で自分を語る	様々な場面で、自信をもって英語で自己を語るができるようにする。	気持ちを伝える／考えや意図を伝える

カリキュラム現段階では、教科書の内容と本校独自のプロジェクト（上記）との関連を中心に作成している。教科書各単元の内容を習得事項、総合単元を活用事項、プロジェクトを発信事項としてとらえ、スモールステップで段階的に学習する流れを意識した。今後は目標を具体的にし、評価規準について検討する必要がある。そして、小中連携から見えてくる成果や課題

の検証を踏まえた系統的な外国語科小中一貫のカリキュラムとして改善していく。

9. 小中連携における実践交流

最終学年である9年生が英語でコミュニケーションを図る姿を下級生が見ることで、学習の目標や見通しを持つことができるようにすることを意図して、エスコートプロジェクトの取り組みの映像^aを6年生と8年生に視聴させた。以下、映像の内容と視聴後の感想の例を示す（図4、5）。

<p>【エスコートプロジェクト当日】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出会い、エスコートプロジェクトの開始 ・「原爆の子の像」の説明 ・平和に関する意見交流会の様子 ・平和集会の様子 ・各班の写真
<p>【エスコートプロジェクトを終えて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お礼の言葉 ・エスコートプロジェクトを終えての感想 ・平和についてのスピーチ
<p>【日本文化紹介】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・附属三原学校園内にあるお茶室 ・茶道の道具 ・三原の祭り

図4 映像の内容^{xi}

<p>エスコート プロジェクトのDVDを見て…</p> <p>私がこのエスコートプロジェクトのDVDを見て9年生さんはすごいなと思いました。それは、案内をされている外国の方が話している内容をよく理解し、その話の内容にあたりアクションをしたり、返事をしている所がすごいと思いました。それと、案内をしている時、広島島の気持ちや自分・原爆をうけた人の気持ちを考え、英語で話している姿がとてもかっこよかったです。</p> <p>それと、案内が終了した後に、案内された外国の方にメッセージを送ったDVDを見て思ったことは、原こうを見ずに（カメラ目線で）メッセージを送っていたのですごいと思いました。それに、スクリーンに映した画像を操作しながらしかも、原こうを見ずにメッセージを送っていたのですごいと思いました。</p> <p>私は、9年生になったら、今の9年生さんのような感じで、外国の方に案内、そして広島島の気持ちを伝えられるようになりたいです。</p> <p>ありがとうございました。</p>

図5 視聴後の6年生の感想

性を示すことができた。

例えば、9年生の「エスコート」の場面を6年生が視聴し、自分たちの修学旅行でのインタビューと比較する中で「身につけたい力」や「なりたい姿」を自分なりにつかみ、その「憧れ」を中学校の英語学習に向けた意欲に転化した事例がこれに当たる。カリキュラム全般においてこの関係性をもつ活動を敷設するとともに、次年度以降その有効性について実践的に検証していく必要がある。

(3) 生徒の実態（意識や「つまづき」）に基づく学習活動の見直し

中学校各期における生徒の意識や「つまづき」について分析し、中学校だけでなく小学校外国語活動まで遡ってその対策を講じる可能性を検討したことで、「出会い」としての小学校外国語活動の中に留意すべき事項を求めることとなった。このことは、小学校外国語活動における「指導」のあり方について、英語の持つ言語的（構造的）特質（特徴）に関する指導者レベルでのより明確な理解と、その体験的な習得を図る意図的活動の重要性を改めて指摘するものとなった。次年度以降、カリキュラムにおける具体的な学習活動の開発と配置を上記の視点から見直していくことが求められる。

次に、課題を大きく以下の3点にまとめる。

(1) 小学校において今後期待される取り組み

小中の円滑な接続を意識した学習指導を進めるために、小学校外国語活動において今後期待される取り組みとして次の3点を挙げる。

① 英語を学ぶ意欲を高める

小学校に期待されることの第一は、中高と長く続く英語学習への意欲を高めることにある。この英語学習への好意や積極的態度を育てることこそが中学校以降への学びにつながるものといえるだろう。そのためには、本校が取り組む様々なプロジェクト（表10）に加えて、日々の外国語活動の中でも、英語を学ぶことでどんなことができるようになるのか、児童の日常と英語がどのようにつながっているのかに気付く場面を設けることが大切になる。

② 話し手・聞き手としての意識を高める

コミュニケーションにおいては「何を言っているか」だけでなく「どのように言っているか」が意味伝達に大きな影響を与える。本稿の「7 育成のための方法・手立て（2）」において話し手・聞き手として意識すべきポイントが示されているが、これらは特に「英

語」という点で限られた表現しか持たない児童にとって有効なコミュニケーション手段となりえる。このことをうまく活用して非言語・視覚情報の活用を含めた円滑なコミュニケーションを意識させたい。ただし、これらを教え込むのではなく、児童自身が話し手・聞き手として「どのように」あれば良やかに気付くような指導が期待される。

また、きちんと聞く・話す態度を育てるためには、発話の場面・状況の設定を丁寧に行うことが重要である。Authenticityの欠落した状況で単にセリフとしての英文を繰り返すだけにならないよう努めることが重要である。

③ 挑戦的自己発信の場を作る

小学校外国語活動でも中学校外国語科でも、自らの考えを述べたり、紹介したりする場面が意図的に設けられている。本稿「7 育成のための方法・手立て（1）①」にも「創意工夫をして、何とか自分でやろうとする力の育成」を目指して「テーマ選びや内容」を児童生徒自身で行っていくことが手立てとして挙げられている。しかし、入門期の学習者にとっては自由に発話・作文することは容易ではなく、指導者によって与えられた定型表現に頼ることが多い。しかし、最終的には私たちは私たちがの言葉で自分の言いたいことを表現することが重要であり、その要素は小学校であっても大切にしたい。定型表現の枠に全員をはめるのではなく、児童生徒の表現したいことを中心に据え、自己発信できるような場を作りたい。小学校からそのような体験を重ねることで、中学校では辞書等を活用しながら、自らスピーチや作文を行うことができるようになることが期待される。このような「挑戦」で小中の英語学習をつないでいくことも小中連携の一つの形ではないかと考える。

(2) 中学校において今後期待される取り組み

① 「エスコートプロジェクト」における指導目標を明確にする

本年度は、教科書の内容とエスコートプロジェクトとを関連づけてカリキュラムを作成した。教科書各単元での学習内容を習得事項、総合単元を活用事項、プロジェクトを発信事項としてとらえて、流れを意識して指導しているが、今後は、教科書教材を用いた言語活動によって身につく知識や技能を、プロジェクトにおいてどのように用いるかの関連づけを十分に行う必要がある。そのためにも、エスコートプロジェクトにおける「期待される生徒の姿」を、情意面のみならず技能面や知識面からも明確に設定し、そこへ至る筋道を、教科書を用いた授業との関係から明らかにしたい。

② 教科書各単元でのコミュニケーション活動を充実させる

初対面の外国の人との対話を行うエスコートプロジェクトを成功させるためには、関連するコミュニケーション活動を普段から十分に行い、技能を高めておかなければならない。教科書各単元は、言語活動の全体計画の中では学習内容の習得に重点を置かれているが、知識の定着だけを意図するものではない。教科書教材を通じて語彙や文法を学び、学んだ知識を活用しながら、技能そのものが身につくよう、教科書各単元で行うコミュニケーション活動の充実を図る必要がある。

③ 目標・指導・評価のさらなる一体化を図る

本年度は、児童・生徒に育成したい力(その素地)を、本稿6の表9にあるように、小・中、それぞれ3項目を設定して指導した。エスコートプロジェクト後の総合単元では、「聞き手が理解しやすいように話す力」を目標に、日本文化を紹介するビデオレターを作成し、相手に送付する試みも行い、その際には、わかりやすい話し方として「強調」や「繰り返し」を評価規準に設定した。事後の反省から明らかになったことは、目標設定の主旨が活かされるような指導の充実と、目標の達成を見取ることのできる妥当な評価計画の重要性であった。

例えば、指導としては、大事なことから強調する、一度ではわかりにくいかもしれないので繰り返すなどの、行為の意味を考えさせることや、相手はどんなことを知っていて、どんなことに興味がある人なのかを想像させたりして、表現する目的を十分に理解させることなどが必要であろう。また、評価においては、具体的に想定しておいた「期待する生徒の姿」と照らし合わせて、生徒個人の目標達成を実際の活動において見取る場面や方法を、当初から指導計画に含めておくことなどが求められるであろう。

(3) 今後の展開

最後に今後の展開のために、総論的な試論を展開してみる。しばしばモチベーションとは学びのための手段でなく、学びの目的そのものであるとも言われる。モチベーションは、短期的にテストの点数を上げるために必要とされるものではなく、生涯にわたって自律的な学習者になるために必要なものであるといった考えである。その点からすると、今回のように上級生と下級生間の交流や、イベント(エスコートプロジェクト)などからモチベーションが立ち上がってくる実践を見ると、私たちは私たちが教育を考える際に用いている「教育学」という構図を問いなおすべきではな

いかとも思えてくる。というのも近代の教育学では、あくまでも教師を行為主体 (Agent)、学習者を従属者・被験者 (Subject) として、教師という行為主体がいかにか学習者という従属者・被験者を操作して、所定の教育目標を達成するかという構図で物事から考えるからである。

そもそも motivation について私たちはもう少し考えるべきであろう (カタカナ化されただけの外来語に関して、私たちは往々にして思考停止をしているので注意が必要である)。“A motivates B to do X.”あるいは“B is motivated to do X by A.”において、究極の目的とされるのはBがXを行うことであり、その時点ではBはXという行為のAgent (行為主体) となるが、それは“motivate”された後のことである。“To motivate” (動機づけ) の時点ではBはPatient (受動的対象) でしかない。“To motivate”の時点ではまた、Aも必ずしもAgentではない。というのもAは、出来事や物品などの意識的行為を起こさないものでもあるからだ。また、Aが人間である場合も、AがBに「motivationを与える」ことは計画通りに行えることではないことは私たちが日常生活で熟知している。そうすれば、AはAgentというよりはSource/Origin (起点・源泉) と考えるべきなのかもしれない。

こうなると、A (典型的には教師) もB (典型的には学習者) も、BがXを行う motivation を得ることに対して、計画通りの行為によって成功を得るAgentではないことが明らかになってくる。“Motivation”をわかりやすい「意欲・ヤル気」という日本語に換えて断言するなら、教師も学習者自身も、学習者が学び続ける意欲・ヤル気を獲得することにおいて、意識的・計画的介入者として常に成功するわけではない。たしかに、教師は学習者の意欲・ヤル気において起点・源泉となることはできる。また、学習者は自らの意欲・ヤル気においてPatient (受動対象) ではある。だが両者は動機づけという行為の主体ではない。少なくともその行為を成功させる能力を本質的にもつ主体ではない。そもそも意欲は「湧く」もの、ヤル気は「出る」ものではないか。意欲・ヤル気には自動詞がふさわしい。意欲・ヤル気を「出す」「振り絞る」といった他動詞の表現にはどこか悲壮感や失敗の予感がないだろうか。

それでは意欲・ヤル気はどうすれば「湧き出る」のだろうか。人びとの関係性からというのが、今回のプロジェクトから示唆されることである。学びをめぐって上級生と下級生がともに率直に語り合い、平和をめぐって生徒が外国人ときこちなくとも誠実に発言を重ねあわせ、それを教師が見守るという生態学的な関係

に無理がなく、その関係が自己組織的に（＝自発的に）発展していくときに、意欲・ヤル気は創発（emerge）する。こういった生態学的関係性を第一に考える構図は、これまでの教育学（特に実験研究からの一般化を目指す教育学）ではとかく等閑視され、関係性からは独立した教授法や教育内容ばかりが強調されてきたのではないか。児童・生徒が変化するのなら、研究的実践者・実践的研究者も変化しなくてはならない。

参考文献

- 1) 文部科学省：『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』，平成20年8月
- 2) 文部科学省：『中学校学習指導要領解説 外国語編』，平成20年9月
- 3) ELCE同友会英語教育学会実践研究部会：『段階的スピーキング活動42』，pp.20-29, 2008, 株式会社三省堂
- 4) 萬谷隆一他編：『小中連携Q & A と実践 小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40ヒント』，2011, 開隆堂出版株式会社
- 5) 松尾砂織・村上直子・柳瀬陽介・檜葉みつ子：「書く力を養う英語科の教材および学習指導開発」，『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』，第39号，pp.369-373, 2010. 3.
- 6) 京都教育大学附属京都小中学校 英語科：『英語教育改善のための調査研究』，平成24年2月17日
- 7) 東野裕子・高島英幸：『プロジェクト型外国語活動の展開—児童が主体となる課題解決型授業と評価—』，2011年6月13日，高陵社書店
- 8) 松川禮子・大下邦幸：『小学校英語と中学校英語を結ぶ—英語教育における小中連携—』，2007年5月4日，高陵社書店

ⁱ 詳しくは本校園編著「21世紀型教育への提言 幼小中一貫で育つ子どもたち」 溪水社，2008. を参照されたい。

- ⁱⁱ 外国籍の方を対象に、本校生徒が英語で平和公園をガイドすることを中心とした活動である。
- ⁱⁱⁱ 研究の概要については、文部科学省ホームページ http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kenkyu/htm/02_resch/0203_tbl/1292578.htm 及び本校園ホームページ <http://www.hiroshima-u.ac.jp/fmihara/kenkyu/> を参照されたい。
- ^{iv} 本校園では小中学校を通した学年呼称を用いている。本稿において7・8・9年生と称する学年は、それぞれ通常の中学校第1・2・3学年に相当する。
- ^v 中学校全学年を対象に、本校独自の問題により年7回実施している。
- ^{vi} 平成24年10月、本校7年生を対象に、独自に作成した問題により実施した。
- ^{vii} 小学校は「Hi, Friends!」（文部科学省）、中学校は「Sunshine English Course」（開隆堂）である。
- ^{viii} 英語によって意思疎通を図らざるを得ない場面を実際に設定し、これまでの学習を生かしながら生徒自身が英語によるコミュニケーションを成立させていく学習活動。単元の学習と平行して実施している。
- ^{ix} 事前調査は平成24年6月21日に、事後調査は同6月26日に、それぞれ実施した。
- ^x 本年度共同研究費から、小中それぞれで使用できるように、ビデオカメラを2台購入した。これらを活用して、互いの授業を録画して教材研究および授業交流をした。
- ^{xi} 本年度エスコートプロジェクトでお世話になった先生方に対してビデオレターを作成した。その際には、購入したビデオカメラを活用して撮影した。12月に本年度エスコートプロジェクトに参加されたアメリカのPhila-Nipponicaの先生と会い、ビデオレターを見ていただき、その様子をビデオで撮影した。1月の授業でその時の様子を生徒に見せ、事後交流として実施する計画にしている。